

# 現代沖縄の米農家事情

滝沢 宏美

## 1. はじめに

日本で有名な米の産地といえば、北海道や東北地方、新潟県などを思い浮かべる人が多いだろう。生産量からみても、これらの地域が上位を占めている。

しかし実際は、沖縄県でも米が作られていることが分かった。現在ではサトウキビやパイナップルに比べるとその生産量はわずかであるが、かつては沖縄県でも稲作が盛んであった。明治～昭和初期にかけては 5,000～8,000ha の作付面積があり、戦後の 1955 年には 12,532ha も生産していた。しかし、1960 年代以降急速に減少し、現在はピーク時の 10 分の 1 以下になっている。

今では米の生産地が一部の地域に集中しており、石垣市が全体の 5 割近くを占め、次いで伊平屋村、伊是名村、与那国町、竹富町となっている。沖縄本島北部でも、生産量は少ないが米が作られている。

沖縄県では温暖な気候ならではの、米作りにおける特徴がみられるという。また、水稲と同じ水田で田芋という植物が栽培されていることも分かったため、それも併せて調査をすることにした。

今回の調査地は沖縄県名護市・金武町・宜野湾市であり、名護市では米と米農家について、金武町と宜野湾市では田芋について調べた。

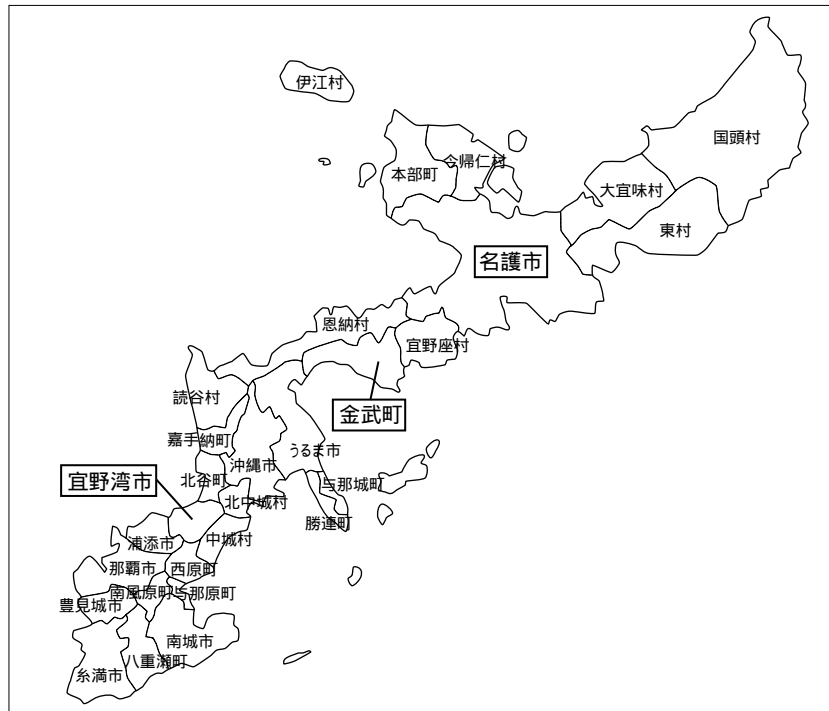


図1 名護市・金武町・宜野湾市の位置

## 2. 沖縄県の稲作の歴史

沖縄県の稲作は玉城間切百名村が発祥地とされているが、それがいつ、どこから伝わったのかについては明らかになっていない。稲は、沖縄では古くから麦類、豆類、きび、あわなどと共に主要食糧として栽培されてきた。

現在の名護市にある羽地大川の流域は琉球でも屈指の穀倉地帯であったが、たびたび氾濫することがあった。しかし、尚敬王<sup>1)</sup>の時代に改修工事が行われ、それ以降農民が洪水に悩まされることはなくなったという。

また、尚温王<sup>2)</sup>の時代には湿田に溝を掘って排水し、耕作を容易にするという作業が本部間切具志堅村で行われた。このような田の整備が王朝時代に行われ、その結果稲作が容易になった。

その他、久米島・糸満・玉城・大里・与那城・大宜味・国頭・伊平屋などの地域でも河川を利用して水を補い、稲作が行われていた。現在は本島北部及びその周辺離島や、八重山地域（石垣島・西表島・与那国島）が主な産地である。

### 2.1 栽培品種について

1881年以前ははっきりとした記録がなく、どのような品種がどのように栽培されていたかは明らかになっていない。在来種及びそれに近い雑品種が長期にわたって栽培されていたという説が有力である。

その後、民間育種家によって選択された羽地赤穂・名護赤穂及び羽地黒穂・中村種などが栽培された。これらの品種は1930年に台湾から台中65号<sup>3)</sup>が導入され、1934年に奨励品種に決定されるまで栽培されていた。

沖縄県の日本復帰後に栽培されている主な品種は、うるち種として台中65号・トヨニシキ・ナゴユタカ・チヨニシキなどがあり、もち種としてはウルマモチがある。また、二期作の基幹となる主力品種としてひとめぼれが1998年以降普及している。

### 2.2 栽培スケジュール

沖縄県の稲作において特徴的なのが二期作<sup>4)</sup>である。二期作は沖縄県の他に、高知県や宮崎県、鹿児島県などの年間を通じて平均気温が16以上の温暖な太平洋側の地方で多く見られる。これは台風の影響を避け、多くの収穫を上げる目的で行われてきた。ただ最近では、米の生産量はその需要に対して過剰となっている状況から、それほど盛んに行われなくなっている。

表1は本島北部のひとめぼれ栽培ごよみをまとめたものである。その年の天候などによって左右されることがあるが、大体はこのようなスケジュールで栽培される。

二期作の特徴として、二つ挙げることがことができる。一つは一期作よりも二期作の方が短い期間で播種～収穫が行われることである。二期作の方がより気候が温暖なため、稲の成長が速いからではないかと考えられる。

もう一つは二期作の方が収穫量が少ないことである。これはほとんど間を置かずに

同じ水田を利用することで土の栄養が少なくなっていることや、栽培期間が短いことなどが原因であると考えられる。

表1 本島北部のひとめぼれの栽培ごよみ JAおきなわ

|                   | 一期作           | 二期作              |
|-------------------|---------------|------------------|
| 播種                | 2月5日(-23日)    | 7月23日(-13日)      |
| 田植え               | 3月10日(0日)     | 8月5日(0日)         |
| 追肥 <sup>5)</sup>  | 3月25日(10~20日) | 8月26日(15~25日)    |
| 中干し <sup>6)</sup> |               | 9月7日~14日(25~35日) |
| 穂肥 <sup>7)</sup>  | 5月1日(50~60日)  |                  |
| 出穂期               | 5月25日(70~80日) | 9月27日(50~60日)    |
| 落水                | 6月18日(98日)    | 10月25日(82日)      |
| 収穫                | 6月25日(105日)   | 11月2日(85~95日)    |

### 3. 名護市羽地地区の米農家

#### 3.1 羽地地区の概要

羽地地区は1970年に合併されるまで、羽地村の最も南に位置していた。現在も羽地地域の入口であるとともに、今帰仁村と山原3村(国頭村・大宜味村・東村)各方面の分岐点であり、これらと名護市街方面の結節点でもある。

農業が盛んな地域で、沖縄本島北部地区のJA(農協)の中心であることから、JA関連施設が多い。



図2 羽地地区の位置

#### 3.2 名護市羽地地区の米農家

羽地地区では現在23名の方が米農家をやっている。米だけで生計を立てることは難しく、ほとんどの人がサトウキビ、畜産、園芸などの兼業である。

ここでは主にひとめぼれが二期作で栽培されているが、個人で黒米や赤米、ミルクイーンなど他の品種を作っている人もいる。

羽地地区におけるひとめぼれの生産量は一期作が約60t、二期作が約40tの合計約100tである。そしてその約一割が自家消費米として消費され、残りはすべて県内で消費されている。羽地米はギフト米としても人気があるため、比較的値段が高い。

#### (1) 羽地地区における稲作の歴史

羽地地区では王朝時代から稲作が行われていたことが分かっている。その後昭和に入っても、戦前は米作中心の農業であった。特に1930年に台中65号が島袋久仁によ

って導入されてからは、稲の二期作が始まった。

水田耕作には数多くの作業工程があり、多くの人手が必要であった。そのため、集落内の親戚や友人同志で各戸を交代でまわって共同作業が行われた。これを「結い廻る」といい、普通は「ユイマール」と称されている。現在では「助け合い、協力」という意味でこの言葉が使われおり、沖縄の県民性を語る上でよく引き合いに出されるという。ユイマールはある一定の人手をそろえて一度に農作業を行うため、能率的でかつ合理的に作業を進めることができた。

また、稲作に不可欠な水利事業も着々と進められ、1917年6月に設立・認可された「羽地大川耕地整理組合」は羽地大川の改修工事に着手した。この工事は1938年に完工し、耕地の区画整理、農道、給排水路、橋梁などが備わった。

戦後の食糧増産の波に乗って、二期作により1年に2回収穫される米は、那覇に直接持って行って販売された。各集落や個人でも精米施設を建設し、増産に励んだのであった。

しかし、1959年7月に今帰仁村に北部製糖が建設され、同年のキューバ危機で砂糖の価格が上昇すると、手間のかかる稲作からサトウキビへ転作する農家が急激に増えていった。その後、稲嶺に北部製糖の第二工場として羽地工場が建設されると、サトウキビと稲作の立場は逆転した。

## (2) 羽地ダムについて

私は今回の調査を行うまでは、沖縄県は水不足に陥りやすいという認識を持っていた。そのような環境で水稻を作るのは困難なのではないか、と。しかし羽地地区ではそのような心配はないようだ。羽地地区には羽地ダムという県内で2番目の大きさのダムがあるからである。また、北部地域だけでもダムが4～5か所あり、比較的水源に恵まれている土地であることが分かった。

羽地ダムの水源は湧き水であり、とても甘く、おいしい水であるという。まだ用水路などがしっかり整備されていなかった頃には、水の奪い合いが起こっていたというほどである。現在もその湧き水は人気があり、わざわざ南部の方から汲みに来る人も少なくないという。この水がおいしい羽地米を作っているのである。



写真1 羽地ダム

### (3) タニシによる被害とその対策

実際に羽地地区の水田を見学してみると、ところどころに苗がまったく育っていない部分が目立つものがあった(写真2)。これは田植え直後の時期に、苗がタニシによって食害されたことによるものである。写真3がタニシとその卵である。

タニシによる被害には、タニシを補殺したり卵を押しつぶしたりする対策がとられている。そうしてタニシの数を増やさないようにしている。

また、稲作における病害虫はタニシだけではなく、いもち病やカメムシ類、イネミズゾウムシなど数多くの天敵が存在している。それらへの対策として農薬散布が行われるのだが、これは羽地地区のすべての米農家が一斉に行うことになっている。1期作につき3回農薬散布をし、各戸の作付面積でかかった経費を割ってお金を出すというシステムになっているという。東北などでは個人ですべての作業を行うことが多いが、羽地地区をはじめ作付面積や生産量が比較的少ない所では、その地域の農家同士が協力し合って米を作っているということを感じた。



写真2 タニシによる被害



写真3 タニシとその卵

### (4) ライスセンター

ライスセンターとは、もみ<sup>8)</sup>の荷受から乾燥・もみすり<sup>9)</sup>・選別・出荷という作業を行う施設である。羽地地区にもライスセンターがあり、羽地のすべての米農家都在这里に出荷している。運転は稲刈り期の1ヶ月半ずつの計3か月のみで、その期間中は元JA職員をパートとして雇っている。運営費は農家からの乾燥料と米の利ざやで賄っている。

手順としては、農家によって刈り取られた稲を生もみの状態でライスセンターに出荷することから始まる。その後、乾燥・もみすりが行われて玄米の状態になる。普通はこの後に、悪い米と良い米を選り分ける選別、精米という工程が行われるのだが、羽地地区のライスセンターは機械が古いためにそれができない。選別が出来ないことで二等～三等米が多くなり、全体的につやのない米になってしまう。また、精米は業者に委託しているため、時間的に小回りが利かないこと、お金が余計にかかることな

どのデメリットがある。機械を新しいものに換えるには億単位の金額が必要となるため、実現するのは難しいという。



写真4 ライスセンター外観



写真5 ライスセンター内部

#### (5) 川上達也さんのお話

今回お話を伺った川上さんは、羽地地区の農家であり、米だけで生計を立てている方である。25年前に親から受け継いだ水田を増やしていき、現在は約4haの水田を基本的には一人で管理している。一人で管理するには大変そうな土地の大きさだが、機械化が進んでいるために大変ではないという。

他の作物を作ろうと考えていた時期もあったが、米作法人がないため、個人では大変で負担が大きいということで諦めたそうだ。

2007年8月末～9月初めに秋田県で稲作に関する研修を受けたというお話があったので、秋田県における稲作の印象や感想を伺った。川上さんは「田んぼや機械の大きさに驚いた。沖縄ではそのまま丸ごと秋田の真似は出来ないから、沖縄独自のものを考えていかなければいけない。」とおっしゃっていた。

川上さんのお話から感じたのは、羽地地区や羽地米に対する愛情と誇り、「さらにおいしい米を！」という情熱であった。そして羽地地区の米農家の方たちが持っているこのような気持ちが、羽地米を支えているのではないかと思った。

#### 4. 田芋

田芋とは水田で栽培される里芋である。高温多湿の気候に適した植物で、亜熱帯アジア各国の水田で広く栽培されている。水中で栽培するためネズミやモグラに食べられることがなく、台風にも強いいため非常用の食料として重宝されている。

沖縄への伝来の時期は明らかではないが、18世紀初頭には栽培が一般化していたという説が有力である。

田芋は沖縄において、子孫繁栄を意味する縁起の良いものである。正月やお盆などの年中行事をはじめ、誕生日や結婚式などのお祝い事の料理には欠かせない食材になっている。

田芋は植えてから約1年間で収穫される。昭和初期以前は正月用として収穫される

冬植（11月～2月）のみであったが、その後春植（3月～4月）や夏植（7月～8月）も行われるようになった。生の状態では出荷されず、一度炊いて芋の良否を判別してから出荷される。

沖縄県の田芋の二大生産地として有名なのが金武町と宜野湾市の大山地区である。

#### 4.1 金武町の田芋

金武町では田芋を使って様々な取り組みを進め、町の活性化を図っている。金武町では、田芋の反収や換金性の高さから、復帰後に特産品として定着した。金武町は水どころでもあり、水量の豊富な川や湧水が田芋の栽培に適していたということもあるだろう。

お祝い事の時に田芋が料理に使われるのはもちろんのこと、金武町では田芋の加工品も数多く売り出されている。「金武町特産品物産センター」には、田芋パイ、田芋せんべい、田芋入りそばなど様々な商品が並んでいる。「田芋はとても栄養があり、行事の時にだけ食べるのではもったいない。日常の食事として食べてもらいたい。」という思いから、田芋の加工品作りが始まったという。

これからの課題として、二つ問題点が挙げられた。一つは田芋の生産は機械化ができないため、供給が需要に追いつかないということ。もう一つは保存が効かないということである。保存性の低さゆえに、県外に出荷することはかなり難しい。田芋が沖縄の特産品として全国的に知られる日が来るよう、金武町では多くの人たちが努力を重ねている。



写真6 田芋の種芋



写真7 田芋畑



写真8 出荷時の田芋



写真9 田芋パイと田芋シュー



写真10 田芋を使った料理

## 4.2 宜野湾市大山地区の田芋

### (1) 大山田芋畑

大山地区の田芋畑は、国道58号と宜野湾バイパスに挟まれた地域に広がる、南北約1.5km、東西100～350mの畑である(写真11)。現在69世帯の農家が田芋を作っている。



写真11 宜野湾市大山地区の田芋畑

### (2) 大山地区における田芋作りの歴史

大山地区では昭和35～36年に田芋の生産が始まった。そのきっかけとして、外国米が輸入されたこと、台風が多かったこと、農業用地が減ったことなどによる、米から田芋への転換が挙げられる。台風が強くと、反収や換金性が高い田芋が稲作に取って代っていった。



その後、連作障害に悩まされることが多かった。連作障害とは同じ場所に同じ作物を植えることによって起こるもので、その作物の生育不良の原因となる。これに対して、土地を休ませる、米と田芋を交替で植えるなどの対策がとられるようになった。

1990年代からは、後継者不足による田芋の生産者の減少とそれに伴う生産量の低下が問題となっている。

### (3) 田芋の販売時期と販売方法

田芋は年に四回、田芋の需要が増えて値段が上がる時期がある。それは4月にある清明祭<sup>10)</sup>、旧盆<sup>11)</sup>、9月～10月にある生年祭<sup>12)</sup>、正月である。田芋は植え付けから収穫まで約1年かかるため、これらの行事に合わせて逆算して植えるのである。

また、植え付けはいつでもできるため、大きい農家では、結婚式や誕生日にも備えて田芋を作っているという。

大山地区における田芋の販売方法は3つある。一つはJAを通してセリにかけられるものである。これは全体の6割を占めている。もう一つは相対売りという方法である。これは購入希望者が直接田芋畑へ行き、農家と値段を交渉するというものである。相対売りは全体の3割程度の割合である。最後が電話による注文で、販売方法としては1割程度である。田芋を掘ってから約一週間で購入者の手元に届くという。これは地元の人からの注文がほとんどであるようだ。

現在は田芋の法人は存在していないが、もしできたらインターネットでの注文も受け付けたいという意見もある。

## 5. まとめ

沖縄の農産物の中では生産量も全国的な知名度も低い米であるが、何百年も昔から現在に至るまで続いてきた様々な歴史があることを知った。その歴史を支えてきたのは米農家であり、この先もさらに歴史を紡いでいくために、工夫や努力を重ねている。

また、田芋は沖縄県民にとってお祝い事には欠かせないものであり、大量生産できないことから高級なものとして扱われ、重宝されている。しかしそんな田芋も生産量が減少してきているのが現状である。

米農家に限らず、農家の後継者不足は深刻な問題である。やがてはその土地の農作物が作られなくなってしまうと同時に、その土地に根付いていた風習や歴史がそこで途絶えてしまうからである。したがって、どのようにしてその土地の特色や伝統や歴史を守っていくのが、これからの課題である。羽地米や金武町・大山地区の田芋を絶やさないようにしようとするならば、全国的な知名度を上げていくことが重要になってくるだろう。

注

1) 尚敬王(しょうけいおう)は琉球第二尚氏王朝の第13代国王である。在位は1713年～1752

- 年。蔡温を三司官にして、多くの改革を行った。
- 2) 尚温王(しょうおんおう)は琉球王国第二尚氏王朝の第15代国王である。在位は1795年～1802年。
  - 3) 台中65号は羽地村の農林技手である島袋久仁によって台湾から沖縄県に持ち込まれた。現在、沖縄県で広く作られている「ひとめぼれ」に比べると、10日ほど生育が遅く、台風などの被害に遭う確率が高い。また、10a当たりの収量が少なく、稲穂から稲が落ちる量も多いそうだ。数十年前には「台中65号」＝「羽地米」として認識され、病気や盆、正月にしか口にすることが出来ないご馳走であった。
  - 4) 二期作とは、同じ耕地から同じ作物を年2回栽培、収穫することである。一般的には米についていうことが多いが、トウモロコシやジャガイモ、ブドウなど他の作物の場合にも、「二期作」という用語が用いられる。
  - 5) 植物の生育に応じて必要な養分を追加で与えることを追肥という。
  - 6) 中干しとは、田への水を止めて、一旦田を干上がらせることをいう。この作業をして稲の栄養成長を止め、生殖成長を促す。また、田の表面を乾かすことで地面がひび割れ空気の通りが良くなり、根が丈夫になり倒伏の危険も少なくなる。
  - 7) 稲穂の成長を助けるために肥料を与えることを穂肥という。稲が穂を作る時期に肥料を施す。
  - 8) 稲穂から脱穀した状態、または外皮に包まれたままの米をもみという。
  - 9) もみからもみ殻を取り除いて玄米に仕上げる工程をもみすりという。
  - 10) 清明祭(シーミー)とは、旧暦3月の吉日に行われる沖縄の三大行事の一つである。中国から伝わったとされ、「清明の節」の期間に先祖の墓に親戚が集まり、線香や花、重箱につめた料理をお供えして供養する。ちなみに「清明の節」というのは、植物が成長をはじめるとき、という意味で活力にあふれた季節を意味している。基本的には清明の入りから15日以内に行うのが基本だが、現在では休日に行うことが多い。
  - 11) 旧盆は、旧暦7月13日から15日に行われる。13日は「ウンケー(お迎え)」といい、祖霊を迎える日である。供え物をして、日暮時に門で火を焚き祖霊を迎える。14日は「ナカヌヒー(中の日)」といい、三度の食事を仏壇に供える。この日は親戚の家をまわり、仏壇に供え物をして線香をあげる。15日は「ウークイ(お送り)」と称して祖霊を送る日であり、夜更けに線香をあげて紙銭を焼く。その後、紙銭を焼いた容器に仏壇の供え物の一部や線香の燃え残りなどを入れ、門前で線香をたいて祖霊を送る。
  - 12) 生年祭(トゥシビー)とは、12年目ごとに巡って来る生年祝いのことである。数え年で85歳、97歳などの人がそれに該当することになる。生まれ年の人には大きな祝いが催される。

#### 参考文献

沖縄県広報誌『美ら島沖縄』2002年12月号

#### 参考ウェブサイト

wikipedia <http://ja.wikipedia.org/wiki/>

沖縄大百科 <http://word.uruma.jp/>

沖縄の農業 <http://www.nochuri.co.jp/report/pdf/r0409in3.pdf>

沖縄病院情報 <http://www.hosp.go.jp/~okihp/joho/joho.html>

金武町商工会「金武町特産品物産センター」<http://shop.kin.cc/tokusan/taimo.htm>

JAおきなわ <http://www.ja-okinawa.or.jp/>